

タイトル		Chrysanthemum				
著者（文・絵）		Kevin Henkes				
出版年		1991	出版社	Greenwillow Books		
翻訳版		N/A				
総語数	1,124 語	ページ数	32 ページ	YL レベル	1.1	
あらすじ						
ネズミの女の子 Chrysanthemum は自分の名前をとっても気に入っていました。学校に行くまでは。意気揚々と登校した初日、Chrysanthemum は周りの子どもたちに名前のことでからかわれ、自信をなくしてしまいます。お父さんやお母さんに励まされて気を取り直すものの、やっぱりみんなにからかわれて意気消沈。憂鬱な日々を過ごしていたのですが、ある時音楽の先生の Mrs. Twinkle が、自分も Delphinium というお花の名前であると明かし、Chrysanthemum という名前が素敵だと褒めてくれたことで、皆もそれに同調するようになり、ようやく自信を取り戻していきます。						
紹介						
名前は親からの最初の贈り物と言われます。子どもの名前には親のいろいろな思いが込められていて、それだけで物語になる要素をたくさん持っています。ところで、菊を意味する Chrysanthemum という名前は英語では変わった名前なのでしょうか？ 英語では例えば Rose や Lily などのように花の名前が女の子の名前として活用される場合はあるものの Chrysanthemum という名前は珍しいようです。日本語でも女の子の名前には梅や菊といった花の名前が使われることもあります。やや古めかしいイメージがありますね。Chrysanthemum もそういったイメージがあるのかどうかはわかりませんが、Chrysanthemum の友達は、「名札に名前が書ききれないくらい長くて、アルファベット 13 文字も必要だ、お花の名前なんて」、と Chrysanthemum をからかっています。 このお話の評価として、先生に名前を褒めてもらった途端、一件落着となったことを残念に思う人もいます。確かに Chrysanthemum は自分からいじめっ子に反論したりすることもなく、教師の介入で初めて自信を取り戻すため、終始受け身であるという批判もあるでしょう。しかし学校に入ったばかりの子どもに、何でも自分の力で乗り越えろというのは酷な気がします。 むしろ教師の指導が大きな影響力を持つというようにとらえることもできますし、大人がどう子どもを励ますべきか考えさせられます。Chrysanthemum が悩んでいるとき、お父さんは密かに Childhood Anxiety(幼年期の不安)とか Understanding Identity(アイデンティティの理解)といった本を参照していました（イラストにユーモアたっぷりに描かれています）。子どもをどう勇気づけていくか考えるきっかけにもなりそうです。 作者の Kevin Henkes は <i>Kitten's First Full Moon</i>(2004)でコールデコット賞を受賞しているアメリカの絵本作家で、邦訳されている作品もありますが、本作はまだ未翻訳のよう						

です。

指導ポイント・授業活用例・学生の声など

【注意すべき英語表現ほか】

➤ お花に関することば

お花にちなんだ名前のお話なので、花の名前が出てきます。Chrysanthemum（菊）, delphinium（ヒエンソウ）, rose（バラ）, daisy（デイジー）, marigold（マリーゴールド）, carnation（カーネーション）, lily of the valley（スズラン）

これを機に、他にも簡単な花の名前を確認してみるのも面白いでしょう。

➤ なじみのない単語

pish（ふん、ちえつを意味する語）、Parcheesi（すごろくのようなボードゲームの名前）など

➤ 繰り返しの効果

絵本らしく同じ表現を繰り返し、そのパターンを破るというテクニックが効果的に使われています。例えば Chrysanthemum が名前のことをからかわれるたびに、She did not think her name was absolutely perfect.と自信をなくす文が使われます。この文が名前をほめられて自信を取り戻す最後に出てくるシーンで以下のように使われていて特に効果的です。

She did not *think* her name was absolutely perfect. She *knew* it!

先生に褒めてもらい、自信を取り戻したのに、なぜまだ完璧だと思わないの？と読者を一瞬戸惑わせたあと、すぐに続けて She knew it!と締めくくっているのです。（私の名前は最高だと「思う」のではなく、最高だと「わかっている」と、think から know に格上げして強調している。）

➤ 頭韻(alliteration) の効果

先生に褒めてもらった Chrysanthemum の反応は、She blushed. She beamed. She bloomed.と書かれています。頭韻（語頭の b の繰り返しの alliteration）を使うことで、顔を赤らめる→ほほえむ→パーっと輝く、という Chrysanthemum の立ち直りの過程をリズム感よく伝えています。

【授業活用例】

➤ ディスカッション

名前に関してはきっと誰もが何らかのエピソードを持っているはずです。この絵本を読んで、それぞれの名前の由来について話してみるのもよいでしょう。また英語の名前のランキングを見て気づいたことを話すというアクティビティも可能です。ある年に生まれた赤ちゃんの名づけランキングはインターネットで簡単に見ることができます。時代ごとに比較したり、アメリカとイギリスの傾向を比較しても面白いでしょう。

➤ 名前をテーマにした本の読み比べ

なお、名前に関する絵本は他にもたくさんあるので読み比べてどの本が気に入ったか話

しあうこともできるでしょう。以下は名前をテーマにした絵本の3例です。(他にも名前がテーマになっている絵本はたくさんあります。)

- Juana Martinez-Neal (2018). *Alma and How She Got Her Name*. Candlewick Press.
長い名前に悩む Alma のお話。でも Alma の名前は家族にちなんで名づけられたもの。その由来を知って Alma は自分の名前を誇りに思うようになります。

- Arlene Mosel (1968). *Tikki Tikki Tembo*. Square Fish.
中国の子どもの名前がなぜ短くなったかという話で、日本の落語『寿限無』に非常に似ています。日本の話が誤って中国のものと理解されてしまった例とされていますが、中国人(アジア人)の名前が意味をなさないナンセンスと受け取られ、人種差別を助長しかねないと危惧する声もあります。加えて、このお話では、長男が珍重され名前も長いのに対し、次男は冷遇され短い名前という設定になっており、東洋の文化＝前近代的と誤解を招く可能性も指摘されています。そういった点で配慮が必要な作品ではありますが、そこも含めて議論することに意味がありそうです。以下のサイト参照。

<http://www.gracelinblog.com/2012/04/rethinking-tikki-tikki-tembo.html>

- Yangsook Choi (2003). *The Name Jar*. Dragonfly Books.
韓国からアメリカにやって来た転校生の女の子 Unhei は、通学バスで名前についてからかわれます。Unhei は周りになじむように英語の名前をつけたいと考え、クラスのみんなはよいと思う名前の候補を紙に書いて瓶に入れてくれるのですが… 本作品も異文化理解とアイデンティティについて考えるきっかけになるでしょう。

関連作品・参考 URL

筆者の Kevin Henkes のオフィシャルサイト(<https://kevinhenkes.com/>)に筆者に関する情報や、本作に関するアクティビティがあります。https://www.kevinhenkes.com/wp-content/uploads/KevinHenkes_DigitalEducatorsGuide_UPDATE-POE.pdf

(文責：小林めぐみ)